

# 「構成的音楽表現」からみた陽音階による音楽づくりのワークシートの機能

## The Function of the Worksheet of Making Music of Yo Scale Based on Constructive Music Expression

溝口 希久生

本論では、「構成的音楽表現」としての陽音階による音楽づくりの活動過程についてワークシートの機能を明らかにした。結論として、ワークシートの指導内容を視覚化することで、まず、個が楽器を鳴らして旋律をつくる作業の場になる。次に、記譜した旋律を基に他者と音楽をつくる下支えと次回の記録になる。さらに、音楽のイメージとそれに合う表現の工夫を記述することで内的イメージと表現との関連を意識した演奏を可能にする。

キーワード：ワークシート、音楽づくり、「構成的音楽表現」、陽音階による旋律づくり

### 1 問題の所在と目的

#### 1.1 問題の所在

小学校音楽科では平成29年告示の新学習指導要領において、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することが目標に掲げられる。「音楽的な見方・考え方」とは「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽の形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連づけること」（文部科学省 2019）とされる。

学習指導要領に平成20年から位置付けられた音楽づくりの活動は、「音楽的な見方・考え方」をまさに具現化できる教材であると筆者は実践を重ねて実感してきた。

音楽づくりの先行研究は、日本において様々な研究・実践が行われてきた。小島（2005）は、音楽づくりを学力観の観点から捉えて2つの考え方に整理している。

一つは、1980年代に外国から輸入された「創造的音楽学習」から「音楽づくり」と呼ばれるようになったものである。音楽をつくるという行為が、音楽語法・技法を操作する行為に焦点化して捉えられている。学力は、作品に統一感を実現するための多様な音素材と音楽語法・技法の操作

技能を重視する。作品を完成まで導くためのイメージや思考については言及されていない。

一方、「構成的音楽表現」と呼ばれるものがある。小島は、「音に直接的に働きかけながら音を構成することを通して内的世界を変化させるという子どもの内側と外側に二重の変化をもたらす」（小島 2005）と定義した。ここでは内的イメージの表現により表現（外側）と思考（内側）が関連して作品が構成されているという点が重視される。

筆者は、感性を働かせて音素材に働きかけ、自己のイメージや感情や生活経験と関連させて、他者と外側に作品をつくっていくという「構成的音楽表現」と同じ考え方に立ち実践を行ってきた<sup>1)</sup>。したがって、本論では「構成的音楽表現」の立場をとる。このような表現を学習者が自発的に展開していくためには、ワークシートの活用が不可欠であると認識してきた。しかし、この活動でのワークシートの機能を十分に把握はしている訳ではなかったため、作成の指針が曖昧になっていた。

ワークシートの機能を明らかにした先行研究には、小栗（2019）がある。小栗は、ピアノ弾き歌い授業におけるワークシートの機能について、イメージをつくり変えたり、交流時に思考を支え、そして学生が表現したいイメージを意識させ演奏につなげるとしている。ここでは、ピアノのグループレッスンで学生同士や教員とコミュニケーション

やイメージの共有のためのワークシートの機能が考察されている。

鉄口 (2015) は、学習状況を可視化するためのワークシートには、「知覚・感受のため」と「表現の工夫のため」があり、知覚・感受したことをもとに、自分が伝えたいイメージを考え、それを表現の工夫につなげさせる場面で活用があるとする。つまり、ワークシートを可視化することで音楽を知覚・感受し、自己のイメージを共有し、表現の工夫に活かすことができるというのである。

上述のワークシートの先行研究は、あらかじめ文化としての音楽的価値が備わった楽曲を教材としたものである。先行研究から楽曲を教材としたワークシートは、音楽を知覚・感受し、自己のイメージを記述し、他者と共有すること、そして、それを表現の工夫に活かすことが重要であるといえる。

本論で扱う音楽づくりを教材としたワークシートについての先行研究は、管見の限りなかった。「つくる教材」<sup>2)</sup>といえる音楽づくりで活用するワークシートは、上述のワークシートの機能に加えて、つくった音楽を記譜することが必要になる。

ワークシートについては、『音楽教育実践学辞典』(横山 2018)によると、「学習者が、授業中の活動の前後あるいは最中に、授業者からの問いに対して自分が考えたことや感じたこと気付いたこと等を記述する質問紙、学習者が自分自身の学びを自覚し、次に展開させることにねらいがある」とされている。

本論では、上述の先行研究を踏まえ、「構成的音楽表現」の原理からみて、表現活動の過程で教師の直接的な指導がなくても、学習者が自己のイメージとかかわらせて自発的に活動を展開できるようなワークシートを作成し、その機能を実証したいと考える。

## 1.2 研究の目的と方法

本論の目的は、「構成的音楽表現」としての陽音階を使った音楽づくりの活動過程でワークシートがどのような機能を果たしているのかを明らかにすることである。

陽音階は、日本の音階の基本の形と捉えられている。本論では、陽音階を使った音楽づくりに取り組ませる。

研究方法は、まず、陽音階による音楽づくりについて整理する。次に、「構成的音楽表現」の立場から研究授業の構想と音楽づくりにおけるワークシートの構想の視点を導出し、それらを踏まえて、陽音階を使った音楽づくりの授業を構想し実践をする。実践を分析し、活動過程でワークシートはどのように働いているのかを質的に解釈する。

## 2 陽音階による音楽づくりのワークシート

### 2.1 陽音階による旋律づくり

今回、単元名とした「わらべうたの構成音」は本来、陽音階と呼ばれる。日本の音階は大きく、陽音階(民謡音階)と陰音階(都節音階)に分けられる<sup>3)</sup>。陽音階は、日本の民謡やわらべうたに最も多い形で日本の音階の基本の形と考えられている(本多 2017)。陽音階は、今までの生活のなかで聞いたことのあるふしである。そのため、イメージをもちやすく、音楽の諸要素の働きとかかわらせながら誰もが容易に旋律づくりができる教材といえる。

日本の音階の創作の指導は、既に昭和 40 年代に、例えば、日本伝統音楽の第一人者小泉文夫が編集に関わった中学校音楽教科書で、日本の音階(陽音階, 陰音階, 律音階, 琉球音階)の系統的指導をした後、日本の音階による旋律の創作が扱われている(本多 2017)。戦後の学習指導要領で、旋律創作が位置付けられてきたが、上述した日本の音階は殆ど扱われず、概ね西洋近代機能と声をもとにしたものであった(溝口 2010)。そこでは、自己の内的イメージと音階を関わらせた旋律創作は行われてこなかった。

そこで、本論では、今までの日本の創作の課題の一つとなっていた日本の音階の陽音階の特徴を自己のイメージとかかわらせて、今までの生活のなかで聞いたことのある馴染みのある雰囲気やイメージを感じ取りながら旋律や伴奏をつくる活動を行わせる。

### 2.2 研究授業構想の視点

研究授業は、「構成的音楽表現」の考え方にもとづき、以下の2点を授業の視点として構想した。

- ① 内的イメージの表現により表現(外側)と思考(内側)が関連して作品が構成されるという考え方に立ち、音楽

- づくりは、個の内的イメージや生活経験を基盤にする。
- ② 音楽をつくっていく過程で、教師は直接的な指導や助言をせず、自発的な活動を促すようなかわり方をする。

### 2.3 ワークシートの構想

以上を踏まえて、「構成的音楽表現」としての音楽づくりを展開していくために、ワークシートは、以下の3点に留意して構想した。

- ① 音楽の形式が可視化され、階名や音の長さを簡単に記譜できるようにする。
- ② 個のイメージやグループで共有したイメージ、そして、工夫したい音楽の表現要素や構成要素を自由に記述できるようにする。

なお、ワークシートは、グループの下支えとなり、自発的な活動ができるように活用させる。

## 3 研究授業の概要

### 3.1 授業の概要

〔科目名〕音楽Ⅱ（専門教育科目）

〔対象者〕W大学教育学部子ども教育学科1年68名

〔実施日〕2022年11月28日、12月6日、13日、（全3コマ）

〔授業形態〕1コマ50分（1コマ100分の授業を筆者ともう一人の指導者で50分ずつ授業を行っている）

〔教材〕わらべうたの構成音（陽音階）

〔指導内容〕旋律（「反復」と「変化」）<sup>4</sup>

〔単元名〕わらべうたの構成音から音楽をつくろう。

〔単元目標〕、〔評価規準〕

〈知識・技能〉

○旋律の音の動き方について理解し、イメージが伝わるように旋律づくりに加えて伴奏やリズムをつくって、アンサンブルをすることができる。

〈思考・判断・表現〉

○わらべうた音階の旋律の音の動き方を知覚し、そこから生み出される特質を知覚・感受する。

○わらべうた音階の旋律と伴奏の音の動き方を意識して、イメージが伝わるように表現を工夫する。

〈主体的に取り組む態度〉

○わらべうた音階の音の動き方に関心を持ち、意欲的に旋律づくりと伴奏やリズムづくりからアンサンブルをする。

### 3.2 授業展開

まず、昨年度の学生の作品の映像を見せることで、音楽づくりへの意欲を喚起させるとともに大まかな音楽のイメージを持たせる。そして、ミソラの3音を使って旋律の反復と変化について経験させる。次に、レミソラドの5音を使って、ABAという旋律の反復・変化を指導内容として楽器を鳴らしながら12小節、4分の4拍子の旋律をつくっていく<sup>5</sup>。そして、旋律に合う伴奏やリズムをつくってグループでアンサンブルをして作品を発表する。

教師は以下の指示以外は、直接的な指導や助言をせず、自発的な活動ができるように心がけた。

①レミソラドの5音のみを使用して旋律をつくるが音域は限定しない。

②1段目から2段目は変化、1段目の反復が3段目、というABAの3部形式にする。

③楽器は、音楽室にある鍵盤楽器や鍵盤打楽器（マリimba、ビブラフォン等）、持参のリコーダーなどが楽器を自由に選択して鳴らしながら旋律や伴奏づくりをする。

表1 指導計画

時	学習活動	ワークシート
1	・旋律の反復と変化について経験する。 ・即興的に音を出しながら、自己のイメージとわらべうたの構成音とをかかわらせながら旋律が反復・変化する12小節の旋律をつくる。	(ア)
2	・グループ全員がつくった旋律の中で最も気に入った1曲を選び、他の人は、楽器を選んで旋律とイメージとをかかわらせながら伴奏づくりや打楽器によるリズムづくりをする。	(イ)
3	・グループで、音色・リズム・旋律の音楽の要素と表現のイメージ・雰囲気とをかかわらせて、アンサンブルをする。 ・グループのイメージと速度や強弱の要素とをかかわらせて工夫して、つくった曲を発表する。	(イ)

## 4 研究授業の事例分析

### 4.1 分析方法

#### (1) 分析対象

5班(奈央子、舞子、福子、多貴子の4名)のなかの奈央子を抽出した。理由は、旋律や伴奏づくりの過程がワークシートやアセスメントシート<sup>6)</sup>に丁寧に記述されていたからである。

#### (2) 分析の視点

旋律や伴奏づくりが発展する過程でワークシートはどのように用いられたかとする。

#### (3) 分析の方法

授業中に記述したワークシート、授業後のアセスメントシートの記述内容に加え、授業後の奈央子へのインタビューを筆録して補完し、上述の分析の視点により活動のまとまりごとに分けて分析し記述する。学生名は全て仮名である。

### 4.2 分析内容

#### 【1段目の旋律をつくる活動過程】(第1時の前半)

奈央子は、まず、陽音階の5音を使って、ピアノを弾きながら初めの2小節を「/ド・ドラ / ソ・ソソ/」とつくりワークシートの表にカタカナで階名を書き込んだ。しかし、ワークシートを見ながらピアノで弾くと「夕日の帰り道」というイメージとは違うと感じて、「/ソ・ソラ /ソ ×/」と書き直し、それを見てピアノで弾くと静かな感じになったので納得した。(図1)

ここでのワークシートは、楽器を鳴らしながら旋律をカタカナの階名で、その音の長さも一目でわかる表にしたので、簡単に旋律を記譜できた。さらに、それを楽器で確かめながら修正を加えることで旋律を完成させていく作業用紙の機能がワークシートにあったといえる。

#### 【2段目、3段目の旋律をつくる場面】(第1時の後半)

奈央子は、1段目より2段目は、音を増やして明るい雰囲気にしようと、最初の2小節は「/ド・レミ / ソミ・ラ/」とつくり、次の2小節は、「/ 下ド・ラソ/ ミソ・ド/」と変化させ

てつくりることができた。

次の3段目はワークシートの表を見れば、1段目の反復であることが視覚的にわかるので、1段目の旋律をそのまま書き込み、最後の終止の音(ド)だけ締めりのある感じにした。(図1)

ここでは、ワークシートの表が指導内容とした音楽の形式として視覚化されていること、加えて、マスに階名を書き入れれば音符の長さがわかるので、反復と変化の旋律づくりを自発的にできたといえる。指導内容が視覚化されることで自発的な活動が促されている。

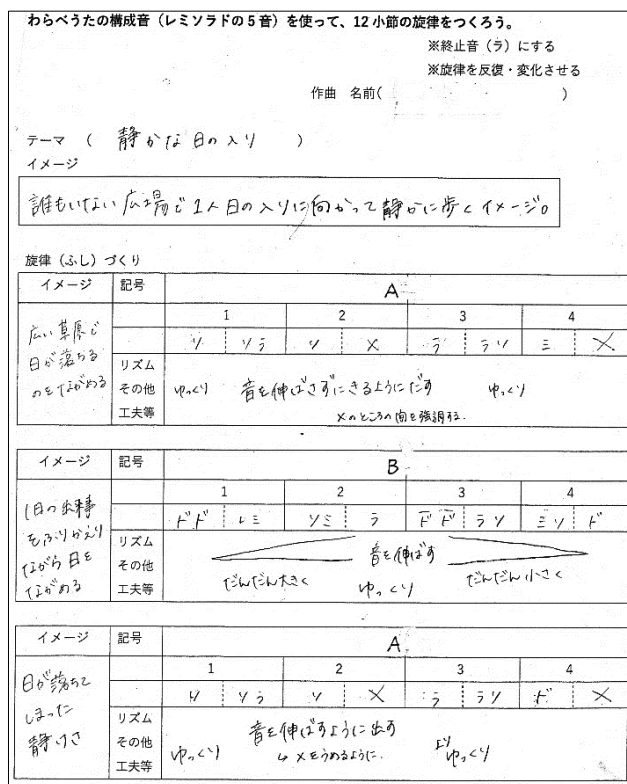


図1 第1時のワークシート(A)

#### 【旋律に合う伴奏づくりを共同で行う場面】(第2時)

個々人が前時につくった旋律をキーボードで弾いて発表し、最も気に入った奈央子の旋律が選ばれた。しかし、グループ全員で奈央子の旋律と一緒に即興的に伴奏を鳴らしてみるとしっくりこなかったため、舞子がつくった旋律に変更した。舞子が旋律を鳴らしながら、他の個々人は選んだグロッケン、鈴、木魚で即興的に表を見ながら伴奏やリズムをつけた。奈央子は、自分の鈴と福子の木魚を重ねて打ったため、旋律がぼやけてしまうと感じて、入れ子のリズム(相手の音の間に音を入れていくやり方)で鳴らすこ



とを提案する。多貴子は、旋律の下支えをしようとグロッケンを「/ド・ラ/ド・ラ/」とオスティナートで繰り返して伴奏にした。そして、全員がつくった伴奏をワークシートの表に記譜した。

その後、通して練習をしていくと、木魚の等拍の響きが際立ったのでテーマを「極楽浄土」と福子が発想し、テーマを書き込んで共有した。(図2)

ここでは、まず、ワークシートに前時につくった旋律で気に入った旋律を記譜し、グループ全体の関係が視覚化され、それが下支えとなり、グループで即興的に伴奏づくりをしていたことがわかる。しかし、つくった伴奏に違和感があったので、リズムの組み合わせを変えて記譜した。最後に、全員のつくった伴奏を記譜して、次回の活動のための記録として残したことがわかる。

【発表のためにつくった音楽を合わせる場面】(第3時)

前時につくったワークシートの表をもとに全員で通し練習をする。そのうち、グループで話し合っ、表のAの部分は「浄土への道をゆっくりのぼっていく感じ」というイメージが共有された。Bの変化の部分は、「天国にたどりついて楽しくなっている」感じにすることが共有された。Aの反復は、「たどりついて、これからをゆったり過ごす」感じというイメージが共有される。そこで、ABAの各部分のイメージを表に書き込んだ。(図2)

その後、各部分のイメージに基づき、Aの部分は、「浄土への道をゆっくりのぼっていく感じ」なので、ゆっくりの速度にしようとした。Bの部分は、次第に強く鳴らし、速度はAより少し速めて演奏するようにすることでここでの感じを出そうとした。最後の反復したAの部分は、旋律を引き立たせようと、再びゆっくりの速度にして、次第に伴奏は弱くすることが意識される。

何度か練習をして納得したので、奈央子は、ワークシートの表現の工夫の欄に、Aの部分は、枠に「全体的にゆっくり」「ピアノがメインできこえるように」「他の旋律はシンプルに」と書き込んでいる。Bの部分は、「盛り上がっていく だんだん大きくなり、速度はゆっくりから少しはじめる」と、Cの部分は、「Aよりさらにゆっくり」「Bが強くなったぶん弱さを意識する」と記述した。(図2)

ここでは、ABAの各部分ごとにイメージを書く欄がある

ので、各部分の具体的なイメージを自発的に話し合っ共有し、記述することができたことがわかる。その後、各部分のイメージに基づいて、演奏(速度や強弱等)の工夫を交流し、音楽記号を使わず自由に書き込むことができた。それが発表のために意識づけて演奏に活かされたといえる。

イメージ		1	2	3	4
A	楽器(名前)				
	ピアノ(ピ)	ミ	ソ	ミ	ソ
	グロッケン(グ)	ド	ラ	ド	ラ
	鈴(ス)	ド	ラ	ド	ラ
木魚(キ)	ド	ラ	ド	ラ	
強弱	全体的にゆっく				
速度等	(ゆっくり)				
その他の工夫	ピアノがメインに聞こえるように、旋律はシンプルに。				

イメージ		5	6	7	8
B	楽器(名前)				
	ピアノ(ピ)	ド	ラ	ド	ラ
	グロッケン(グ)	ド	ラ	ド	ラ
	鈴(ス)	ド	ラ	ド	ラ
木魚(キ)	ド	ラ	ド	ラ	
強弱	盛り上がるように → だんだん大きくなり、				
速度等	速度もゆっくりから少し速める				
その他の工夫					

イメージ		9	10	11	12
A'	楽器(名前)				
	ピアノ(ピ)	ミ	ソ	ミ	ソ
	グロッケン(グ)	ド	ラ	ド	ラ
	鈴(ス)	ド	ラ	ド	ラ
木魚(キ)	ド	ラ	ド	ラ	
強弱	Aよりさらにゆっく				
速度等	Bより強くなったぶん弱さを意識する。				
その他の工夫					

発表は2回くり返す  
→ 2回目には鈴と木魚の9と10の9と10を入れ変える

図2 第2・3時のワークシート(イ)

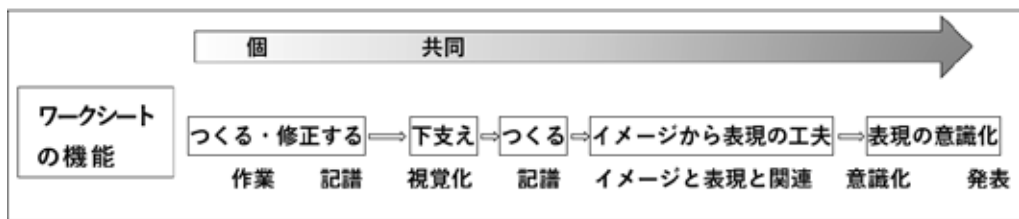


図3 活動過程におけるワークシートの機能

## 5 結論と考察

### 5.1 結論

本論では、陽音階を使った音楽づくりの活動過程でワークシートがどのような機能を果たしているのかを明らかにすることを目的とした。

上述した分析結果より活動過程に沿ってワークシートの機能を整理する。

- ①まず、個で旋律をつくる過程では、楽器を鳴らしながらつくった旋律を記譜したり修正を加えたりする作業の場になる。
- ②次に、他者と音楽をつくる過程では、記譜した旋律と全体の関係が視覚化されてアンサンブルの下支えになる。また、つくった音楽が記譜されることで、次回の活動の記録となる。
- ③さらに、表現を工夫する過程では、指導内容に沿って音楽のイメージとそれに対応した表現（速度や強弱等）を記述することで、内的イメージと表現とを関連させるので、それを意識した演奏を可能にする。

以上、ここでのワークシートに指導内容が視覚化されていることで、学習者の自発的な音楽づくりが促される。

### 5.2 考察

教師は、研究授業で音楽をつくっていくことに関して指示や指導はせず、学習者の自発的な活動が行われた。

読譜力や記譜力に乏しい学習者が大半であり、五線譜での記譜は時間を要する。しかし、今回のワークシートは、指導内容（反復と変化）が視覚化され、カタカナの階名や音の長さを簡単に記譜できるようにしたことは自ら活動を進めることができた要因としてまずあげることができる。

そして、最も重要な点として以下のことがあげられる。

「構成的音楽表現」という内的イメージと表現（外側）が関連して作品が構成されるという音楽づくりを促すには、ワークシートのなかに指導内容の形式に応じた思考（内側）にあたるイメージを記述できる枠と表現（外側）にあたる旋律や伴奏を形づくる枠を設けることである。その2つの枠があることで、学習者は自発的に内側と外側を関連させて作品を構成していくことができたといえる。

さらに、つくった音楽から生み出されたイメージに合うように他の要素（強弱や速度など）を探して、ワークシートに記述することで、演奏への意識化ができた。

ワークシートに内的イメージや表現の工夫を言語化することで、それらが認識され、思考を伴って表現をさらに工夫していくことができると考えられる。今回のワークシートによる内的イメージは言語化のみであったが、発達に応じて、絵に描く、オノマトペ、身体活動といった方法で外に表すことを設定することも有効な方法になるであろう。

今回は、陽音階による旋律づくり（反復と変化）を指導内容としたが、他の指導内容で授業を構成した音楽づくりを、今回の知見で得たワークシートの機能を踏まえて作成し実践を検証することが課題である。

### 註

- 1) 筆者は、例えば、溝口(2009)などで音楽づくりの実践を継続して行ってきた。
- 2) 「つくる教材」について、西園(2005)では、「音楽づくり」は、前もって学習内容が備わっているのではなく、教師がテーマを教材化し展開する中で学習内容を設定していくものと述べている。
- 3) 日本の音階のうち半音を含まない五音階。陽旋法ともいい、半音を含む陰音階と対比的に用いられる。陽旋(田

舎節)と陰旋(都節)に分類したことが由来。レミソラドレ(上行形)、レシラソミレ(下行形)などと説明される。(新編音楽中辞典 2002)

- 4) 「反復」は、リズムや旋律が繰り返される仕組み。連続してくり返される反復だけでなく、A-B-A-C-Aの「A」のように合間をおいて繰り返し替えられる反復やA-B-Aの3部形式の「A」のような再現も含む。「変化」は、リズムや旋律が反復した後に異なるものが続く変化、変奏のようにリズムや旋律等が少しずつ変わる変化を含む。(小島 2015)
- 5) 実践とワークシートは、西園監修(2009)の実践例を参考にした。
- 6) 「アセスメント」とは、査定という意味をもつ。価値判断をする前に、学習の状況がどうなっているかを判断すること。そのための質問紙をいう(小島 2018)。実践の「アセスメントシート」は、単元終了後に、どのような要素が関わって旋律をつくったのか、その活動過程を陽音階の構成音(レミソラド)、旋律の雰囲気・イメージ・感情等、ワークシートの3つの観点を使って記述させた。

## 引用・参考文献

- 小栗裕子(2019) 『『ピアノ弾き歌い』授業におけるワークシートの機能 -保育者養成課程での実践分析を通して-』 『東海学院大学紀要』13 p.116
- 小島律子(2005) 「戦後日本の『音楽づくり』にみられる学力観 -『構成的音楽表現』からの問い直し-」 『学校音楽教育研究』9 日本学校音楽教育実践学会紀要 pp.194-201 p.199
- 小島律子(2015) 『小学校音楽科の学習指導 -生成の原理による授業デザイン』 廣済堂あかつき pp.156-157
- 小島律子(2018) 「評価方法」 『三訂版 小学校音楽科の学習指導 -生成の原理による授業デザイン-』 廣済堂あかつき p.161
- 鉄口真理子(2015) 「3.指導と評価の一体化のためのワークシート」 『音楽科授業の理論と実践-生成の原理による授業展開-』 あいり出版 pp.111-119
- 西園芳信(2005) 『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究 -「芸術の知」の能力の育成を目的として』 風間書房 p.270
- 西園芳信監修(2009) 「創作 わらべうた音階による旋律づくり」 『中学校音楽科の授業と学力育成 -生成の原理による授業デザイン』 廣済堂あかつき pp.74-76
- 本多佐保美(2017) 「昭和40年代中学校音楽教科書にみる日本伝統音楽の取り扱い -小泉文雄編集教科書における日本音階の学習指導を中心に-」 『千葉大学教育学部研究紀要』第65巻 p.9 pp.8-12
- 溝口希久生(2009) 「小学校1~6年生における『創造的音楽づくり』の発展的様相 -指導内容の三側面の関連性に着目して-」 『学校音楽教育研究』13 日本学校音楽教育実践学会紀要 p.30
- 溝口希久生(2010) 『小学生を対象とした「創造的音楽づくり」にみる音楽的発達に関する研究 -表現内容の論理性に注目して-』 兵庫教育大学大学院博士論文 p.30
- 文部科学省(2019) 『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説音楽編』 東洋館出版 p.10
- 山口修監修(2002) 『新編音楽中辞典』 音楽之友社 p.720
- 横山真理(2018) 「ワークシート」 『音楽教育実践学辞典』日本校音楽教育実践学会編 音楽之友社 p.82

## 付記

実践の分析対象となった学生には、データ使用の承諾を得ている。また、本研究における事例を示す際には、匿名化して掲載した。

